ライフリンクの「沿革」

1998年　日本の自殺者数がはじめて３万人を超える。（97年の24391人から32863人へ急増。）

2000年　３年連続して自殺者数が３万人を超える。

２月　「あしなが育英会（西田が所属）」が「第１回自死遺児ミーティング」を開く。全国ではじめて自死遺児の存在に着目し、子どもたちの「こころのケア」に乗り出す。

４月　自死遺児たちが小冊子『自殺って言えない（「あしなが育英会」編）』を発行。社会に対して自死遺族のつらい胸の内をはじめて明かす。

８月　清水がＮＨＫディレクターとして自死遺児の取材を始める。

2001年　４年連続して自殺者が３万人を超える。

７月　西田が「自死遺児の心の傷とケアを考えるシンポジウム」を企画、全国での実施に乗り出す。

10月　清水が制作したＮＨＫの番組、クローズアップ現代『お父さん死なないで～親の自殺遺された子どもたち～』が放送される。番組を通して、それまで匿名で活動していた自死遺児のひとり、久保井康典さんが、はじめて社会に対して顔と名前を公表し肉声で語る。

12月　久保井さんを筆頭に７人の自死遺児が、顔と名前をさらけ出して小泉首相に陳情する。「自殺対策の必要性」を訴え、その模様がテレビや新聞などで報道される。

〃　清水が制作に関わったＮＨＫクローズアップ現代・年末スペシャル『“痛み”を見つめて』が放送される。久保井さんが生出演。

2002年　５年連続して自殺者が３万人を超える。

２月　厚生労働省が「自殺防止対策有識者懇談会」を発足させる。

４月　鈴木がサンマーク出版の編集者として自死遺児の取材を始める。

11月　鈴木が企画・編集した『自殺って言えなかった。』（サンマーク出版）が上梓される。小学生から大学生まで、18人の自死遺児たちが思いをつづったはじめての手記集。

〃　清水が制作したＮＨＫおはよう日本・特集『支え合う“自死遺児”たち』が放送される。自死遺児たちが、手記集『自殺って言えなかった。』に込めた思いをドキュメントで伝える。国会の代表質問（鳩山由紀夫民主党代表・当時）で、『自殺って言えなかった。』（サンマーク出版）や、おはよう日本『支え合う“自死遺児“たち』のことが取り上げられる。

12月　「自殺防止対策有識者懇談会」が『自殺予防に向けての提言』を発表し、解散。（会合は計７回のみ）

〃　『自殺って言えなかった。』が６万部（８刷）を突破する。

2003年　自殺者数が34427人と過去最悪を記録。

2004年　自殺者数は７年連続して３万人を超える。

５月　清水、西田、鈴木が集まって「ライフリンク設立準備会」を開く。これまでの自殺対策が大きな成果を上げられていないことに鑑みて、「新しいつながりによる、新しい解決力」の必要性を確認する。

10月15日　ＮＰＯ法人「自殺対策支援センター ライフリンク」が正式に発足する。

2005年２月　第１回ライフリンク自殺対策シンポジウムを開催。

５月　第２回ライフリンク自殺対策シンポジウムを開催する。

【ライフリンクへの入会について】

ライフリンクは、「新しいつながり」を求めています。
それぞれの可能な範囲で（例えば月に１、２時間でも）
活動の一端を担っていく「正会員」と、
活動を主に財政的な側面から支援する
「賛助会員」を募集しています。

会員になると……

①ライフリンクが主催するシンポジウムなどの各種イベントに、優先的に参加することができます。
②ホームページ上の「トーク・リンク（掲示板）」に参加できます。
③ライフリンク通信（年４回）が届きます。
④１年に３～４回開かれる「ライブ・リンク（定例会）」に参加できます。（ただし、正会員のみ）
⑤ライフリンクの新たなプロジェクトを立ち上げたり、すでに進行中のプロジェクトに参加したりすることができます。（但し、正会員のみ。また理事会の承認が必要です。）

入会の条件

「ライフリンクの理念に共感していただけている」こと、その一点のみです。

入会費および年会費

○正会員　入会金：5,000円　年会費：10,000円
○賛助会員　入会金：なし　年会費：一口5,000円より

入会までの手順

①メールか郵送にて「入会の申込み」をしてください。
お申し込みに際しましては下記の“必要事項”をご記入ください。
○ご希望する会員の区分（正会員または賛助会員）
○入会される方の氏名（法人や団体の場合はその名称・代表者名）
○ご住所、電話番号、メールアドレス、生年月日
○特技や専門分野など
（ただし、匿名を希望される方は、メールアドレスなどの連絡先のみでも結構です。）
②希望する会員区分の「入会金・年会費」を振込んでください。
東京三菱銀行 渋谷支店　普通口座:3561088
特定非営利活動法人　自殺対策支援センター　ライフリンク
③入金が確認された時点で、事務局より「会員証」をお送りいたします。

注意事項

○会員は、理事会が別に定める退会届を理事会に提出して、任意に退会することができます。（定款第10条）
○この法人の名誉を傷つけ、又は目的に反する行為をしたときは、除名となる場合があります。（定款第11条）
○途中退会の場合の入会金・年会費はご返却いたしかねますので予めご了承下さい。（定款第12条）

なお、**「ライフリンク通信」の購読のみを希望される方**は、年間購読料（送料込み）が2000円になります。入会の手順と同じように申し込んで下さい。

国家レベルの自殺対策「フィンランド報告書」ライフリンクに翻訳許可

多彩なプロジェクトが続々

国を挙げての総合対策で、自殺者の減少に成功したフィンランドの実践を日本にも生かしたいと、「フィンランド報告書」の翻訳作業を進めている、ライフリンクのプロジェクトチームに、6月30日、正式な翻訳許可が下りました。同国の「STAKES」（フィンランド国立社会福祉保健研究開発センター）からメールが入ったもので、「翻訳料（印税？）はいらない、出来上がったものを5冊送ってください」との補足がありました。

このプロジェクトは、会員の鈴木須美子さんと海老原あや子さんが英語版からの翻訳を進める一方で、日本での翻訳・刊行の許可を同国政府に要請していたものです。同国出身で日本で活躍しておられるツルネン・マルティ参院議員（民主党）の協力もあって実現しました。

今後の展開については、次項のプロジェクト紹介に述べていますが、ライフリンクの運動にとって素晴らしいニュースです。

『フィンランド報告書』翻訳

▽目的…フィンランドはどのようにしてこれ程の成果を出すことができたのでしょうか。本プロジェクトは、フィンランド報告書（英文版）を日本語に翻訳することで、日本の自殺対策の一助を担うことを目的としています。

▽内容…「フィンランドにおける自殺防止プロジェクト」（1992～1996年）は、フィンランドが86年から96年にかけて10年間取り組んだ自殺防止対策の報告書です。自殺率を5分の1まで縮小させることを目的として、各地方に適した自殺防止対策の方法をさぐり、実際の自殺防止対策実施へつなげていきました。

▽進行状況…簡易製本版の翻訳が5月16日に完成しました。普及版は、秋田大学の本橋豊先生に監修をお願いし、9月10日を目標に出版作業を進めています。希望者に実費で広く配布できる形を考えています。

「埼玉自死遺族の会」立ち上げ

▽目的…ライフリンクの第1回シンポジウムでは、自殺率の高い埼玉県の方々から多くのお問い合わせや要望が寄せられました。しかし、埼玉県には遺族会がありませんでした。本プロジェクトは埼玉県が県主導で『埼玉自死遺族の会』を立ち上げるためのサポートとバックアップを行います。

▽内容…埼玉県の自死遺族が安心して語り、お互いに分かち合うことのできる『自死遺族の分かち合いの会』の運営にあたって支援を行います。ただし、ライフリンクが会を運営していくわけではありません。ライフリンクのみではできることに限りがあるため、あくまでも県主導で自死遺族の会が運営されるためのサポート役です。

▽進行状況…05年4月16日に第1回会合をさいたま市内で開催し、遺族会設立に向ける積極的なアプローチを県に対して行って行くことが決まりました。5月3週目には県へ要望書を提出しました。それに対し、「県が主体的に遺族会を立ち上げるのは難しい」との回答があったので、6月15日に、第2弾として「難しい理由を具体的に文書で示してほしい」との要望書を出しました。

「シリーズ対談「いま自殺を考える～」

▽目的…日本社会における「自殺の問題」とは一体何なのか。私たち自身の「いのち」とどんな関係があるのか。私たちは「自殺」とどう向き合い、この時代・社会をどう生きていくべきなのか。

ライフリンクが取り組む自殺対策の両輪である「実務」と「（価値観への）提言」。「提言」のためのプロジェクトとして、清水康之代表が、「自殺」をテーマにして、各界の才能と本音でぶつかり合う対談シリーズです。

▽進行状況…第1回は、瀧本智行さん（映画監督＝自殺をテーマにした映画『樹の海（Jukai）x』を6月下旬に公開）に聞きました。第2回は、重松清さん（作家）を予定。

▽今後の展開…対談の内容はライフリンクのホームページで紹介していきます。

遺族会ファシリテーター養成講座

▽目的…遺族会の最初で最大の作業は、長い間ひとり悲嘆を閉じ込めてきた心を開くことから始まるが、百人百様の悲嘆を吐き出し合うことは口で言うほど容易ではない。そこで重要な役割を果たすのがファシリテーター。アメリカで親を亡くした子どもの心のケアを行っているダギーセンターから講師を招き、良きファシリテーターになるための訓練を受けた人材を養成して、各地での遺族会の立ち上げや運営を支援する。

▽内容…ファシリテーターは語り合い、分かち合いの進行に関わるが、リーダーでもなければカウンセラーであってもならない。話者が考えたり話したりしようとする時、『やりやすくできるよう』サポートする役。そのために「受容」「自覚」「反映」「会話」のスキルを講義やロールプレイで学ぶ。

▽進行状況…10月下旬に開催予定で共催団体と調整中。有料になる。

借金自殺対策コラム

▽内容…どんなに借金で苦しくても、前向きに「よ～し、やってやるぞ！」と借金整理をする気になってほしい。借金自殺を防止するために、今まで個人的に活動してきた吉田猫次郎さんが、ライフリンクの会員としてホームページにコラムを執筆中。

リンク・カレンダー

◇**7月16日**　「第5回自死遺児シンポジウム（佐賀）」主催＝佐賀ビッグフット。ライフリンクの清水代表や西田副代表がパネリストとして、会員の久保井康典さんが講演者で参加しました。

◇**9月10日**　WHOが定める『世界自殺予防デー』

・「ライフリンク〝緊急〟フォーラム『自殺総合対策のグランドデザインを考える』（東京）」。

・「自死遺族のグリーフケアと自殺防止シンポジウム（北九州）」共催＝北九州市、NPO法人北部九州ホスピスケアの会。

◇**10月1日**　「第30回日本自殺予防シンポジウム（仙台）」主催＝日本命の電話連盟。

自殺は社会で防げる

現場の声を結集　第2回シンポジウム

「出来ることはすぐやる」と厚労相

「自殺を防ぐために　いま私たちにできることとは」と題して、「ライフリンク」は5月30日、東京・永田町の参議院議員会館第一会議室でシンポジウムを開き、民間12団体でまとめた「国に対する5項目の提言」を発表した。一般の参加者で200人を超す超満員となった会場には、尾辻厚生労働大臣、武見敬三・参院厚生労働委員会理事をはじめ衆参の国会議員11名と議員代理としての秘書らあわせて30名以上が出席した。

1998年から7年連続しての自殺者3万人。その背後には30万人の未遂者がおり、さらに背景にはそれによって心に打撃を受ける180万人が存在するといわれている。自殺3万人とは当事者だけでなく、実に年間200万人が痛みを負う深刻な事態なのだ。

シンポジウムの冒頭、清水康之代表は「今朝も大東島で3人がネット自殺した。我々にとって身近な問題であり、防止対策もいろいろ言われているのに対策は遅れている。自殺を防ぎ、遺族をケアするため、今できることを官民が一緒になって取り組み、対策を前に進めていこう」と呼びかけた。

第1部で、自分も経験した中小企業経営者の倒産自殺問題と取り組む佐藤久男さん（秋田・蜘蛛の糸）、夫を過労自殺で昨年亡くした南部節子さん（茨城）が体験を話した。第2部では、自殺対策の現場から佐藤まどかさん（大阪・親の自殺を語る会）、西原由記子さん（東京自殺防止センター）、団野克己さん（佐賀・弁護士として多重債務者対策）、本橋豊さん（秋田大学教授・県の地域社会全体での自殺予防活動で成果）が、国の総合対策の必要性を訴えた。

これらの発言のあと、尾辻厚労相は、「胸が詰まる思いでお話を聞いた。気持ち分かりましたでは、ことはすまない。真剣に何がやれるかを考え、できることをすぐやらせてもらいます」と述べた。

シンポの最初に、武見議員は「超党派でしっかり取り組む」。シンポへの参加を議員に呼びかけた山本孝史参院議員は最後に「皆の気持ちをしっかり受け止めながら活動していく」と挨拶した。

「分かりましたではすまない。真剣に考える」とその場で答える尾辻厚生労働相

西原由記子さん

佐藤久男さん

団野克己さん

南部節子さん

本橋豊さん

佐藤まどかさん

▼ 第1部での佐藤久男さんの話

秋田県では、平成になってからの15年で6400人が自殺している。これは一つの町がなくなったことになる。私も従業員40人、年商15億円の会社を倒産させ、残務整理に追われてうつ病になり、やがて首つりの幻覚にとらわれた。

全くの自費でNPO「蜘蛛の糸」を始めたが、3年間で延べ500件を超える相談を受けてきた。50代後半から60、70代で、地方ではスーパーの進出など経済環境の変化についていけなくなっての倒産が多い。岩手や青森からも来るので、相談できるところが各県に1つあってまとまったらよいと思う。

相談の現場で感じることは、倒産自殺は防げるということ。連帯保証の問題と、一家の柱として家族のため家は残したいとの思いが死を選ぶ理由として大きいが、一過性であり、自殺者の7割が倒産6ヶ月以内、1年以内が3割となる。3年間アフターケア出来れば防げると思う。

▼ 南部節子さんの話。

横浜に単身赴任していた夫が、平成16年2月11日夜、以前住んでいた大和郡山市で鉄道自殺した。昭和60年に大阪で会社が倒産し、東京で再就職したが、以来、週休2日を休んだことはない。得意先から「南部さんがいるから会社は大丈夫だ」と言われ、「皆の給料を稼がなければ」と、体をこわし好きな酒も飲めなくなっても頑張っていた。

遺書には「仕事ができない、どうしてかわからん」とあり、「ごめんなさい。かんにん」が何度も書かれていた。死んでから、私はサインを見逃してしもたこと、お父さんのことを何も知らなかったことに気づいた。調べたらお父さんはなにも悪いことをしていない。それなのになんで「ごめんなさい」と言わなければならないのか。皆さんも早くからサインに気づいてほしい。明日は自分の身かも知れないのだから。

続いて第二部で、自殺防止の相談電話を開いたり、自殺遺族のケアにあたったりしている「民間の現場」からの発言が行われた。

▼ 佐藤まどかさんは「親の自殺を語る会（大阪）」の主宰者。自身も30年前に父親を自殺で亡くした。「歳月を重ねても、あの苦しみ、痛みは消えないが、人に話すことによって、少しずつ和らぐことはわかった」。

で、3年前に「語る会」を立ち上げた。奇しくも、父が亡くなった41歳に、自分もなっていた。あの悲しかった子供のころと、今の自分が重なり、「悲しかった事実を、事実として語っていける場所をつくるしかない」と腹をくくった。集まる数は決して多くないが、年齢層は10代から60代までと幅広いという。

（11面へ続く）

自死遺族支援に向けて　遺族会のつながりを！

反響呼んだ第１回"緊急"シンポジウム

「自死遺族支援に向けて　遺族会のつながりを！」ライフリンク発足第１回の緊急シンポジウムは、２００人を超す参加者で、期待の大きさが示された。

→多方面から出席のパネリスト
↑２００人を越す熱心な参加者

シンポジウムは2月20日午後1時から東京・代々木の国立青少年センターで開会。清水康之代表が「自殺者年間3万人が続く中で対策は一向に進まず、遺族の会は全国でわずか10団体程度。ライフリンクはせめて各県に1つぐらいできるよう、その立ち上げと連携を支援していく」と挨拶した。

第1部では、自死遺児の大学生が「つどいで同じ遺児と出会ったことで自分は前に踏み出せた」と体験を語った。

第2部のパネルディスカッションでは、パネリストの佐藤まどかさん（大阪・親の自殺を語る会）が、遺族として語り合うことの意味を、金子久美子さん（福島・れんげの会）が、看護師の立場から遺族ケアの会を立ち上げようとする苦労を語った。西原由記子さん（東京自殺防止センター）は、遺族同士のやりとりから遺族が癒される情景を話した。

川野健治さん（国立精神・神経センター）は、遺族の聞き取り調査を行った結果をスライドで示しながら、「一つの団体があらゆる遺族を支援するのは難しいから、組織同士のネットワークが必要」と強調した。松井孝之さん（大阪府健康福祉部）は、自殺予防対策の一環として体験談を募集した経緯を紹介、「民間と連携し行政のできる役割を考えたい」と話した。

第3部は参加者が十数人ずつのグループに分かれての話し合い（7面に写真）。パネリストも加わり、ライフリンクのスタッフがファシリテーター役をつとめたが、遺族の参加者の中には亡くした家族と自分の経験を話し出す人も多く、こうした機会が待ち望まれていることが感じられた。

一方で、遺族ではないが自殺の問題に日頃から関心をもっている参加者も多数あり、会場でのアンケートでは、「遺族の方々の本当の気持ちが聞けてよかった。自分になにが出来るか考え、この問題と取り組んでいきたい」などの感想が寄せられた。

第4部のパネリストへの質疑応答を経て、5時前に終了したが、1度の小休憩をはさんで4時間に及ぶ長時間に、途中で帰った参加者がほとんどいないという中身の濃いシンポジウムだった。

（10面から続く）

▼「東京自殺防止センター」創設者の西原由記子さんは、「自殺未遂者へのケアが行われていないのはおかしい」と切り出した。「センター」では、「死にたい」とかけてくる電話相談に応じ、遺族の悲嘆分かち合いの会も開いてる。「自殺をしようとする人が、なぜ私たちの防止センターに電話をかけてくるのでしょうか。自分の居場所がなくて、仕方なく電話をかけてくるんですよ」と、電話の向こうの「叫び」のやるせなさを指摘し、「こうした対応には官民が力を合わせ、多方面からやっていくしかない」と強調した。

▼　佐賀県自殺対策協議会のメンバーである弁護士の団野克己さんは、１６０人を対象にした「多重債務者アンケート」の結果を明らかにした。それによると、「自殺を考えたことがある」が63人、「自殺したが未遂だった」が10人。「借金によるストレスを抱えている人は92人にのぼった。でも、精神科を受診した人は11人しかいなかった」。

団野さんは、借金の法的対応と心療的ケアの必要性を述べ、「これは行政と民間が手をつながないとできない」と力説した。

▼　次いで、秋田大学教授の本橋豊さん（公衆衛生学）がマイクを握った。秋田県は、都道府県別に見ても自殺率が高い所。お年寄りの自殺も多い。本橋さんは、「自殺防止のためにはうつ病対策だけでなく、悩みを抱える人に対し、うつ病になる前にどんな手助けができるか、社会の問題として考えていくべきだ」と話した。人々の心のうちにある自殺への偏見、思い込みをただし、解決への力を与えていきたい。本橋さんは「社会を揺り動かす」と表現した。

これらの発言のあと、尾辻厚労相の発言（10面）となったが、清水代表が「もう国としてやるべきことは分かっているはず。２００２年の厚労省の『自殺防止対策有識者懇談会提言』もあるのだから、民間まかせにしていないで、政府も一体となって自殺対策に取り組んで欲しい」と注文をつけ、大臣が「おっしゃる通り。あとは具体的なところで検討し、実行に移していきたい」と応える場面もあった。

最後に、清水代表が「未遂者のケアや遺族のケアなどは、民間のボランティアが手弁当でやっているが、すでに活動は限界。また地方自治体が取り組む自殺予防も、自治体レベルでは越えられない縦割り行政の壁があってもう限界。あとは国が、自殺対策に取り組むかどうかが、いままさに問われている」。司会の西田正弘副代表が「対策は、予防、危機介入、ケアの三場面を網羅して立てる必要がある。痛み、苦しみをきちっと受け止める社会を形作っていきたい」としめくくった。

リンクメイト

とにかく〝ビッグ・フット〟

「あしながを支援するにはビッグフットで」総会での中尾会長

「佐賀の遺児はさがんもんでさえんばね」を合言葉に、県単位で、親を亡くした遺児たちを支援する〝草の根〟活動団体。その活動は、名前のあしながが育英会支援を超え、２００１年に開いた「自死遺児シンポジウム」がきっかけで、県内の官・学・民あらゆる関連機関を網羅した「佐賀自殺対策協議会」が発足、この動きが他県の手本になっている。

活動内容を、同会のホームページと補足を加えて紹介する。

１９９７年に全国的に行われたあしながが育英会主催の「あしながガン遺児ウォーク６０００」に参加したメンバーが中心となって、１９９８年６月に結成。

《活動の目的》あしながが育英会の事業を佐賀より支援し、地域への貢献と温もり溢れるフィランソロピー（やさしい人間愛）社会の実現に向け、明日を担う遺児たちに元気とエールを送る。

《活動の内容》①あしながが育英会（親を病気・災害・自殺で亡くした子への奨学資金制度）の啓蒙活動（親がいないこどもたちに進学への希望を持てるようにしてあげたい）＝いのちの講演会開催や中学校で講演（中尾朱実代表ら）。

② 佐賀の遺児の精神面からの支援（まずは、第一歩を踏み出す勇気を）＝県内の遺児のつどい、キャンプやバーベキュー大会。

③ 阪神大震災遺児への支援＝熱気球の佐賀バルーンフェスタへ、神戸の震災遺児を毎年招待。

④ 学生募金、あしながＰウォーク10など、あしながが大学奨学生の活動への支援＝メディアで開催紹介。当日は会員も一緒に活動。

⑤ 自殺防止への取り組み

a．年1回シンポジウムの開催。

b．県自殺防止協議会への参加。

⑥ 会の活動資金作り＝寄付依頼、講演活動、チャリティーバザー、自主制作ＣＤの販売・ＰＲ。

中尾朱実代表「自殺のない社会づくりを目指し、佐賀の地からも全国へ向けて現場の声を発信していきたいと思っております。今後ともよろしくお願いします」。

【ライフリンク平成16年度収支報告】

（16年10月15日～17年3月31日）

収入の部	
・会費収入	805,000円
・民間助成金収入	300,000円
・自治体助成金収入	0円
支出の部	
・シンポジウム開催事業	240,000円
・ホームページ開設事業	180,000円
・役員報酬・給料手当	0円
・事務所手当	180,000円
・通信費	72,000円
・消耗品費	39,000円
・資料費	15,000円
・私書箱レンタル費	29,000円
・打ち合わせ費	8,000円
支出計	763,000円
当期収支差	342,000円
（次期繰り越し）	

シンポ準備会議の後、密かに仕組んだ33才の誕生パーティー。贈り物にちょっとウルルンの清水代表

自己他己 会員紹介

思いこんだら実行！ 白面のやんちゃ坊主

元ＮＨＫディレクター。在職中は報道局に所属し、主に「クローズアップ現代」を担当する。自殺の問題に関心を持ち始めたのは、自死遺児たちとの出会いがきっかけ。突然親を失った悲しみや寂しさに耐えながら、自殺に対する社会の冷たい目に怯え苦しむ彼らの存在を知り、自死遺児をテーマにした番組を作ろうと決意する。

１年以上に及ぶ子どもたちとの関係作りを経て、２００１年10月、『お父さん死なないで～親が自殺遺された子どもたち～』を放送。番組は、それまで匿名で活動してきた自死遺児が、はじめて素顔と実名を明かして「思い」を語る姿を伝え、大きな反響を呼ぶ。その後の彼らの活動を、大きく後押しするものとなる。

番組放送後も、自死遺児の取材を続けながら、自治体の自殺対策や自殺者の遺書などについての取材を進める。しかし、「もっと時代を先回りした自殺対策が必要」との思いに駆られ、自ら当事者となって自殺対策に取り組もうと、２００４年3月にＮＨＫを退職。ライフリンクを設立し、会の代表として活動を始める。現在、法科大学院に入学し、弁護士になるための勉強を始めている。（１年間休学し、05年4月より復学。）

「自殺の問題は、社会における私たち自身の『いのちのあり方』の問題である」というのが持論。そのため自殺対策には、危機介入と自殺予防、遺族支援に加えてもうひとつ、価値観の見直しが必要だと訴えている。「生き心地の良い社会」を築いていくための提言を積極的に行っている。

鈴木七沖談　「とにかく言ったことは必ず実行するという、私にとっては羨ましく、すばらしい人格の彼。走りすぎてハラハラするときもありますが、絶大なカリスマ性も兼ね備えているので、これからも大いに暴れまわっていただきたいと思います。やっぱり『ライフリンクに清水あり』ですね！」

西田正弘談　「ライフリンクを始めてから、やんちゃ坊主に凄味が入ってきたと、私は感じている。凄味というと険しい顔と思われるだろうが、ニタ～ッと笑ったときのなんともいえぬ達成感が顕れ出た顔だ。もう少し言うと、それはカラオケでオザキを熱唱している顔に近い？　会うときはいつも飲んでる西田より」。